「教師力向上」教育実践力継承事業についての報告

久御山町立久御山中学校

1　学校としての取組のまとめ

(1) 研究主題

「耕心」　　知恵を耕し、心を耕す授業づくり
～確かな学力の充実と向上をめざして～

〈研究の目標〉

「すべての教科で言語活動の充実の視点を持った授業の展開を工夫し、学習基盤の確立と確かな学力の充実と向上をはかる」

「教師力」を教員の年齢構成・経験年数や教科指導の方法、生徒の学力などの実態を考慮して、「教師力」の一部ではあるが、教師の本業である教科指導に焦点を当てた「授業力」と捉えた。そして、「授業力」の向上をテーマに、指導顧問である大阪教育大学の木原俊行教授の指導助言のもと、次の２点について研究に取り組むこととした。

ア　授業改善の取組を通して、授業力の向上を目指す。

イ　教科内での研究や教科間での交流等を基盤として人材育成を進める。

(2) 取組内容

ア　研究主題を受けた特徴的な取組

(ｱ) 授業改善を通した授業力の向上

・「言語活動の充実の視点を持った授業の展開の工夫」の観点から、次の二点を重点として取り組む。

①音声　…基礎・基本の徹底を図るための手段として、単元や教材の内容から音声による反復学習に適したものを指導者が選び、毎時間の授業導入時等の工夫として実施する。

②かくろん…論理的思考力を向上させ、基本的な文章を書くための二つの型（「主張の型」・「意見の型」）を定着させる。

(ｲ) 教科指導と家庭学習の課題をリンクした家庭での学習習慣の確立

①家庭学習の実施と評価…各学年で実施している終礼学習や家庭学習と授業とのリンクの在り方について研究を進める。

(ｳ) 授業改善に焦点化した校内研修会の実施

全教員が授業改善プランを作成し授業改善の実践を進めるにあたり、「授業改善の具体的方策について」、「授業改善プランの作成」、「重点テーマに沿った実践」の研修会とその後の教科部会をリンクさせながら教科研究を進めた。

校内研修会から（ＫＪ法を用いた授業改善プランの検討）

(ｴ) 授業改善の重点テーマを絞った教科研究と研究授業の実施

①ねらいの提示と振り返り

②習得型授業と活用型授業

③家庭学習と教科指導のリンク

以上の三つの重点テーマから一つを絞り、テーマが見える授業の展開を目指した教科研究と「研究授業はチャレンジ」を合い言葉に研究授業に取り組んだ。

イ　取組の時系列

４月	・研究推進委員会全体計画の作成と提示（職員会議） ・各教科の取組の実施計画立案（５教科教科主任及び学年主任）と実践
５月	授業公開週間の設定
６月	指導顧問訪問指導 ・授業参観 ・学校の実態報告 ・今後の研究の方向性と日程の調整 職員会議 ・研究推進の方向性の確認 ・中間テスト後のＲ→ＰＤＣＡ実施報告（各学年５教科担当者及び学年主任）
７月	指導顧問訪問指導 ・校内研修会「授業改善の具体的方策について」 実施報告を基に各教科ごとの授業改善プランの作成（５教科部会及び学年会議） ・統一指導事項の確認 ・２学期以降の重点指導事項の確認 ・生徒の努力目標・到達目標の授業での明示の方法の工夫 ・基礎学力充実のための具体的な方策の工夫 （家庭学習の充実に向けた各学年の取組とリンクの方法） 山城教育局学校支援訪問 ・学校の現状、取組状況報告
８月	校内研修会 ・教科ごとに作成した授業改善プランをもとに、２学期以降の授業改善プランの作成と検討 ・２学期以降の取組の方向性の検討
９月～	授業改善プランの実施
10月	研究授業Ⅰ（国語科）
11月	指導顧問訪問指導 ・授業参観 ・研究授業Ⅱ（英語科） ・校内研修会 授業公開週間の設定
１月	研究推進会議 職員会議 ・３学期に向けた授業改善テーマの絞り込みと実施
２月	指導顧問訪問指導 ・授業参観 ・研究授業Ⅲ（社会科、数学科、理科） ・校内研修会

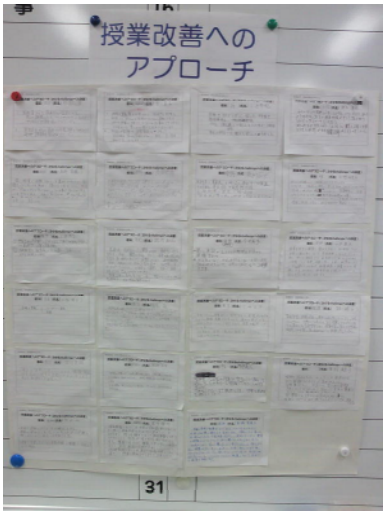
ウ　人材育成に関わる成果と課題

(ｱ) 成果

・授業改善をテーマとした形態の異なる研修会を持つことで、授業改善へのアプローチを意識する機会が増えたり交流することで、実際の授業改善につなげたりすることができた。

・５教科ではあるが、研究授業を実施することができ、互いに参観し合うとともに、確かな学力の充実と向上や授業改善をテーマとした研究協議ができた。

・研究授業の実施に向けた取組（教科部会、教科研究、研究授業、事後研）を通して、教科内や教科を超えての交流、その中で経験豊かな教員から若い世代へ指導方法や考え方を伝える機会ができ、授業力の向上に繋がった。



－模造紙に張って交流－

(ｲ) 課題

・家庭での学習習慣の確立については、教科指導とのリンクをねらったが、学年任せとなり、全体の授業力の向上に結びつけるためにはさらなら研究が必要である。

・研究授業の実施に向けた取組を通しての指導方法等の継承は見られたが、日常的に学級経営などを話題にした“気軽なおしゃべり”を通した情報交換の必要を感じる。

エ　人材育成から考える組織の活性化の成果と課題

(ｱ) 成果

・本事業推進のために、本年度校務分掌に「研究推進委員会」を新たに設けた。構成員を校長、教頭、研究推進部主任、教務主任、生徒指導主任、学年主任、５教科主任とし、研究テーマやプランや校内研修会、研究授業の検討を進めることができた。

・家庭での学習習慣の確立については、教科指導とのリンクに課題が残ったが、学年の取組としては学年主任を中心に学年団のまとまりが見られた。

(ｲ) 課題

・日常の校務に追われ、会議の設定や研究の計画的な実践を進めるという基本的なことに課題が残った。

・校務分掌において、組織全体を見渡してミドルリーダーのポストを考え、有効に活用する必要がある。

(3) 成果を受けた今後の方向性

ア　教職員の意識改革

教科研究や授業研究、教師力の向上に結びつくような校内研修会がこれまでほとんど行われていなかったため、教職員の意識改革がまず必要であった。本事業を推進することにより、研究推進会議や研究授業、校内研修等を実施する中で否応なく日常の授業を振り返り、授業改善を意識することができた。

今後は、確かな学力の充実と向上を目指してさらに授業改善を進め、その過程で指導方法等を伝承し教師力の向上を図るという教職員の意識改革を推進していきたい。

イ　「くみ中スタイル」の確立

本年度は、本事業の指定によりスケジュールを設定したが、次年度からは「くみ中スタイル」として年間計画上に研究会を位置付け、研究推進や人材育成等の

体制の確立を図る必要がある。

(4) 本事業にかかる取組資料等の説明

ア　学力向上ビジョン実践報告書(中間テストまでのCheck→Action)

イ　学力向上ビジョン実践報告書（夏季校内研修に向けての宿題）

ウ　夏季校内研資料

エ　授業改善実践報告書３学期・年間まとめ

２　管理職の視点から考える本事業の成果

(1) 人材育成の考え方の変容

・学校教育の活性化は、直接の担い手である教師に負うところが極めて大きい。つまり、教師一人一人がその資質能力（「教師力」）を向上させることが学校教育の活性化に繋がると考える。そこで、「教師力」の中でも特に教科・年齢等を問わず共通している個々の教師の「授業力」向上を人材育成の視点に当て、焦点化して取り組むこととした。その結果、研究活動を通して授業改善を図り、「授業力」を高める意識の高揚が見られる等、徐々にではあるが成果が現れてきている。

ア　教職員評価制度との関連

・自己評価目標の設定では、授業改善・授業力の向上を目標としている教師が大半であり、教職員評価制度の観点と具体的な関連が見られた。

・多忙な業務の中で研究活動を推進しながら人材育成を図るためには、若いうちから学校経営に参画するといった意識を持たせる必要がある。

(2) 組織の活性化に向けた現状分析から考える自校の特色づくり

ア　教職員の意識

・本研究活動の具体的な手法を取り入れることで活性化した授業に変容してきており、全教師が授業力の向上に繋がると確信でき、意欲の向上に繋がっている。

・各教師が授業改善へのアプローチを作成し、職員室にそれぞれを掲示することで意識の高揚と自己改善の意識付けとなった。

・教師同士が相互に力量を高め合う雰囲気の醸成に繋がった。

イ　組織のシステムづくり

・学校の組織力を高め、研究活動が全教師の共通した目標とするため、21年度新たに研究推進部を校務分掌上の組織として設置した。

・学力向上の達成を目指す組織としての研究推進部では、授業改善の研究と家庭学習のあり方研究を両軸として進めている。授業改善では活動の成果が得られているが、家庭学習では授業内容との関連付けに課題が残っている。

ウ　学校経営計画及び学校評価の変容

・人材育成が学校経営上の主要課題であり、それぞれの立場で人材育成に取り組む意識が高まったことは大きな成果である。

・学校評価は学校評議員やＰＴＡ役員から随時受けているが、アンケート調査等の数値評価が未実施のため学校評価の変容については把握し切れていない。

３　ミドルリーダーの視点から考える本事業の成果

(1) 取組から考える人材育成についての自らの意識の変容

ア　自らの教育実践を見つめ直し、思想化することを意識化

　これまでの自らの教育実践は「ありのまま見てください。そして自分の参考になることを取り入れてください。」というスタンスだった。これでは自分が本当に伝えたいことが他者に伝わりにくい。それに比べ指導顧問の先生の話は、具体

的な実践を例に出され、大変わかりやすい内容であった。おそらく先生の教育思想（哲学）を基盤に数多くの実践を整理分類され、本校の課題に照らし合わして指導していただいたからであろうと思われる。

私も今後は今まで蓄積したことを他者にも理解しやすいように整理分類し、音声や文字でも「伝える」努力が必要だと痛感した。また、その過程において、自分が大切にしてきたことが明確になり、自らの教育思想（哲学）としていくことができることに気付くことができた。

イ　学校経営の視点で学年経営や本事業への参画を意識化

ミドルリーダーとされる30～40歳のスタッフが少ない中で、本事業「教師力向上」教育実践力継承は私達がミドルリーダーとしてしっかりと自覚しなければならない課題であると再認識した。教育実践豊かな諸先輩のノウハウや教育理念をしっかり継承し手実践することや、次世代に伝えることが安定した学校運営を支える基盤となることは言うまでもない。

また、校長のめざす学校づくりに向けて、自分の果たすべき役割は何かを自覚しながら学校経営に参画する視点を持たなければならないことがわかった。

(2) 取組から考える自校組織の活性化

ア　教科部会の活性化

指導顧問の先生は、来校ごとに「私の授業改善宣言」など、次回までの課題を出された。この課題が教科内での話し合いを促し、明確な目的を持った教科部会を年６回以上開くことができた。

イ　研究推進部の新設による研究の活性化

今回新たに「研究推進部」を設けたことは「研究を一歩踏み込んで進めなければいけない。」という意識を全ての教員に持たせる上で効果的であった。加えて研究推進部長が、自らも日々の実践を充実させながら、４回の研修会では管理職の指導の下、明確なテーマ設定と意見交流における論議の軌道修正により、教職員を牽引したことが研究の活性化にも繋がった。

(3) 教職員の意識の変容

ア　５教科で音読プリントを活用

漢字や英文構造暗記のために国語・英語で活用していた音読プリントを社会・数学・理科でも作成して取り組み、知識定着率が向上した。これは、本町の小学校で行われている取組を取り入れたもので、小中連携の成果でもある。

イ　職員室内で授業について語る機会が増加

「私の授業改善宣言」は職員室内に掲示され、それをＰＤＣＡサイクルでより良く改善していくこと、研修会ごとにその進捗状況の報告が求められることで、研修会や研究授業の前後を中心に職員室内で授業について語る機会が増えた。この文化が定着することで、教育実践力の継承が期待される。

ウ　指導顧問の先生の指導助言による授業改善の意欲向上

木原先生は、研究授業当日のデジカメ映像をその日の事後研修会のプレゼン内に取り込んで指導助言されることに驚いたが、いろいろな授業改善の切り口があり、小さなことからでも取り組んでいこうという意欲に繋がった。

また、プラス面を強調する先生の指導助言は、私たちの授業改善への意欲をさらに高め、モチベーションを保ち続けることができた。

久御山中学校における本事業の成果と課題

大阪教育大学　教授　木原　俊行

1．はじめに

久御山町立久御山中学校（以下，久御山中学校）に筆者が初めて訪れたのは，平成21年6月初旬のことであった。この日，ほぼすべてのクラスの授業を見学した。また，学校長・教頭等に，資料をもとに，学校の状況に関して説明してもらった。平成21年度の研究計画なども示してもらった。

それらから，同校の教師たちが子どもの学力の向上に向けて，努力を重ねていることが実感できた。しかし同時に，その原因は定かではないが，必ずしも子どもたちの学びの充実に結実していないことも分かった。

その後，筆者は，7月，11月，2月と同校を訪れ，学力向上の実践動向を解説したり，そこで企画・運営された授業研究会に参加したりした。幸い，筆者が有する学力向上施策の体系に依れば，学校訪問の回数が増えるに従って，同校の取り組みに進展が確認された。それは，同校の教師たちの「教師力向上」を目指した努力と工夫の成果を物語るものである。

本小論では，同校の授業改善の進展や授業研究の充実を解説するとともに，次年度以降の課題についても言及する。

2．授業改善の進展

（1）家庭学習に関する指導の工夫

今日，家庭学習の重要性が衆目の一致するところとなっている。しかも，それは，家庭学習の時間の確保だけでなく，それと授業とのリンク，とりわけ，活用型や探究型の授業づくりに資する家庭学習課題の設定にも及んでいる。

久御山中学校の教師たちは，そのような実践動向を踏まえ，宿題の点検を徹底する他，例えば，「授業ノートを集約する『まとめノート』づくり」等の工夫にも着手している。

（2）活用型授業への挑戦

思考力・判断力・表現力等の育成に向けた，活用型授業の取り組みは，多くの小中学校に共通する実践的課題である。学習指導要領総則に依れば，その方法論は以下のようになる。

> 確かな学力を育成するためには，基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させること，これらを活用して課題を解決するために必要な思考力，判断力，表現力その他の能力をはぐくむことの双方が重要であり，これらのバランスを重視する必要がある。
>
> このため，各教科において基礎的・基本的な知識・技能の習得を重視するとともに，<u>観察・実験やレポートの作成，論述など知識・技能の活用を図る学習活動を充実すること</u>，さらに総合的な学習の時間を中心として行われる，教科等の枠を超えた横断的・総合的な課題について各教科等で習得した知識・技能を相互に関連付けながら解決するといった探究活動の質的な充実を図ることなどにより思考力・判断力・表現力等を育成することとしている。（下線部，筆者）（以下，略）

久御山中学校の授業においては，先に下線で示したような場面が増えている。例えば，写真 1 は，11 月の英語科の授業の様子である。生徒は，クラス全体に対して，またペアを組んで，自らが考えた文章を表現している。

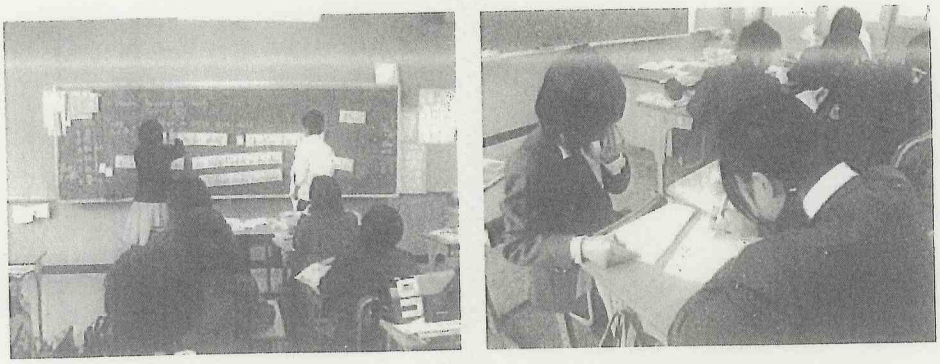


写真１　英語科の授業における能動的な活動

さらに，久御山中学校の教師たちは，活用型授業の充実に向けて，教材の開発等にも着手している。例えば，数学科の教師は，基本的な図形の体積の求め方を導入した後，それをより複雑な形の求積に適用させていた。また，理科では，指導者は，教科書を用いて地震に関する基礎的な知識を生徒に付与した後，地震に耐える建物の特徴等について生徒に考察させていた。また，家庭科の授業では，教師が，被服のデザインが人に与える印象を指導した後，生徒に，それを自らのファッションに対して適用させ，被服に関する思考を深めさせていた（写真 2）。

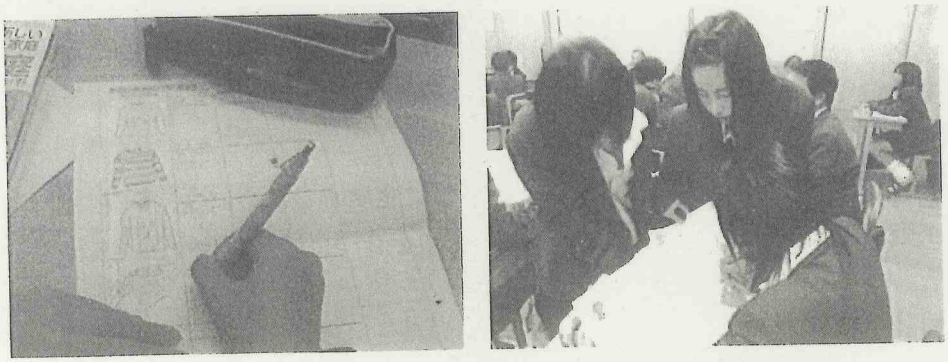


写真２　教科書による学びを自らの生活に適用させる（家庭科）

３．授業研究の充実

校内研修の主柱は，授業研究会（研究授業とそれを題材とする協議会）である。ところが最近，協議会におけるディスカッションが盛んでないと嘆く声をよく耳にする。どうすれば，授業研究会を実りあるものにできるのだろうか。この問題の克服を願い，研究授業後の協議会に，いわゆる「ワークショップ」など能動的な活動を導入する営みが普及しつつある。

平成 21 年度，久御山中学校でも，それにチャレンジしてもらった。一般に，教科担任制を採用しているため，中学校では異なる教科の授業を見学し，それについて意見を述べるのは難しいと考えられている。けれども，久御山中学校では，言語活動の充実，教科指導と家庭学習のリンクといった課題を教科観・教師間で共通理解している。また，活用型授業の成立に資する学習活動や教材は合科的なものが少なくないという点も踏まえて，学校全体で授業研究に取り組むことと

なった。写真３は，その様子を示すものである。すべての教員が，当該研究授業について気づいたことを積極的に表出し，それを交流する中で，授業づくりのアイデアの共有化に貢献している。同時に，（研究授業を実施していなくても）自らの授業づくりに関する省察を深めている。

さらに注目すべきは，同校の授業研究のスタイルの多様化である。写真３のように，全教員が同じ授業を見学し，それについての批評等をグループ単位で繰り広げる場合もあれば，４つの研究授業を並行して実施し，分科会を設定して，研究授業ごとに，その特徴と課題等を語り合う場合もある。さらに，研究授業に関する気づきの表出と整理も，同校の教師たちは，生徒－教師という軸を設定したり，導入・展開・まとめという指導過程を分類の視点に定めたりしている。

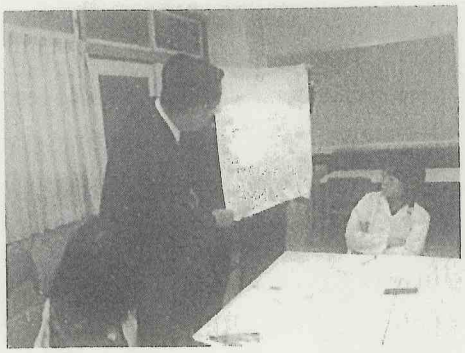


写真３　参加型の事後協議会の様子

これらの多様性は，久御山中学校の教師たちの授業研究に対する熱意の高まり，その手法の成熟を物語るものである。

４．さらなる期待

平成22年度以降に久御山中学校の実践研究がさらに発展するためには，その企画・運営に関して，いくつかの点の改善が期待される。代表的なものを２つだけ掲げよう。

（１）１学期に授業研究会の開催を

前述したように，久御山中学校の授業研究は，これまでになかったスタイルで実施された。その結果，授業づくりのアイデアの環流が実現した。それだけに，その機会が１学期に設定されなかったことがおしまれる。それが催されていれば，８月の授業改善プランの作成等で用いられるアイデアが増えたのではないかと思うからである。ぜひ，早いスタートをご検討いただきたい。

（２）指導案や実践報告をさらに厚く

久御山中学校には，授業のプランやレポートを綴ることによる授業改善をさらにていねいに進めていただきたい。平成21年度に目にした指導案はすべて（資料等を除くと）１ページであった。「授業改善実践報告書」も同様である。これらの文書は，それを題材にして教師間でコミュニケーションを図るための材料に過ぎない。だから，学校における実践研究においては「書くこと」よりも「伝え合う」ことの方が重要ではあるが，それでも，材料が豊富であることが教師間の対話を活性化すると筆者は考える。子どもたちに言語活動の充実を求めている，久御山町の教師たちには，ぜひ，この点にも努力を傾注し，指導案や実践報告の厚みを増していただきたい。